「アメリカ」・ユダヤ人とシオニズム／ユダヤ人国家
－1910年代から1920年代アメリカ・シオニスト機構の指導部の変遷を通じて－

京都大学地域研究統合情報センター研究員・関西大学非常勤講師
池田有日子

ユダヤ人国家イスラエルの建国にあたって、アメリカ政府に対する圧力という現実政治的観点からしても、ユダヤ・ナショナリズムとしてのシオニズムのイデオロギーの維持という観点からしても、「アメリカ」・ユダヤ人のユダヤ人国家建設に対する支持を獲得しうるか否かということは、シオニスト運動にとって、極めて重大な意味を有していた。そして、戦後の建国過程において実際にアメリカ・ユダヤ人の多くがそれを支持したことは、ユダヤ人国家イスラエルが現実化するうえで、大きな要因の一つとなっていたといえるだろう。

しかしながら、アメリカ・ユダヤ人がシオニズム／ユダヤ人国家建設を支持することは決して「自明」なことではなかった。むしろ、「二重の忠誠」を疑われ、反ユダヤ主義を刺激し「シオン（実際の土地としてはパレスチナ）への帰還」を強制されかねないものとして、敬遠・忌避すらされる存在だったのである。

本報告は、主に1910年代後半から1920年代後半に至るアメリカ・シオニスト運動の指導権の変遷過程や他組織との関係のあり方を、アメリカの政治・社会動向や国際政治動向もふまえて検証することを通じて、「アメリカ」・ユダヤ人のシオニズム／ユダヤ人国家をめぐる錯綜・変容するポジショニングのあり方を明らかにしたい。

具体的には、同化ユダヤ人であり革新主義派の法律家でもあったブランダイスが組織再編する形で設立した、アメリカ・シオニスト運動の政治活動の中心であったアメリカ・シオニスト機構（TheZionist Organization of America、ZOA）の指導部を主軸として、

①アメリカにおける「ユダヤ人会議」開催をめぐるZOAとアメリカ・ユダヤ人委員会（The American Jewish Committee）との交渉過程と帰結
②戦後におけるブランダイス派とワイズマンとの対立を経て、1922年にブランダイス派がZOA指導部の座を辞する過程
③1929年にブランダイス派が復権した背景と過程

について検証、検討したい。